

甘樫丘東麓遺跡の調査

—第151・157次

第151次調査

遺跡の位置 甘樫丘は飛鳥川の西岸に広がる標高約150m、比高約50mの丘陵である。現在は国営飛鳥歴史公園甘樫丘地区として整備され、多くの観光客が訪れている。丘陵の東麓にはいくつかの谷が入り込む。調査地もそれらの谷の一つで、約6,000㎡の平坦地が広がっている。

遺跡の北東約600mには蘇我馬子が建立した飛鳥寺があり、南東約800mの飛鳥京には、歴代の宮殿が展開した。甘樫丘東麓遺跡は、飛鳥地域の西端にあたるが、きわめて重要な場所に立地している。

これまでの調査 甘樫丘東麓では、小規模なものも含めて7回の発掘調査がおこなわれている。駐車場建設に伴う第75-2次調査では、谷の入口付近で7世紀中頃の焼土層を確認した。焼土層からは土器とともに焼けた壁土、炭化木材が出土しており、『日本書紀』に記載された蘇我蝦夷・入鹿の邸宅との関連が指摘された（『藤原概報25』）。また、公園整備に伴う第141次調査では7世紀の掘立柱建物群を検出した（『紀要2006』）。さらに、2006年度から遺跡の内容を解明するための学術調査を続けている。第146次調査では石垣、掘立柱建物、塀、石敷、炉、溝など多くの遺構を確認した。7世紀の遺構はⅠ～Ⅲ期に分けられ、7世紀を通じてこの地が活発に利用されていた様相が判明した。また、Ⅰ期とⅡ期の遺構のいずれかが蘇我氏の邸宅と関わる可能性が浮上した（『紀要2007』）。

今回の調査区は第146次調査区の南西に接し、調査面積は950㎡。調査期間は2007年11月12日から2008年4月28日までである。

1 検出遺構

基本層序 層序は上から順に表土、明灰色砂質土（近世の土器を含む堆積土）、茶褐色砂質土（中世の土器を含む堆積土）、黄褐色粘質土（Ⅱ期の整地土）、橙灰色粘質土（Ⅰ期の整地土）、黄褐色砂質土（地山）である。谷の縁辺部では明灰色砂質土直下で地山が露出する。また、Ⅱ期の整地土である黄褐色粘質土は谷の中心付近の狭い範囲のみに残存し、遺構の多くは地山とⅠ期の整地である橙灰色粘

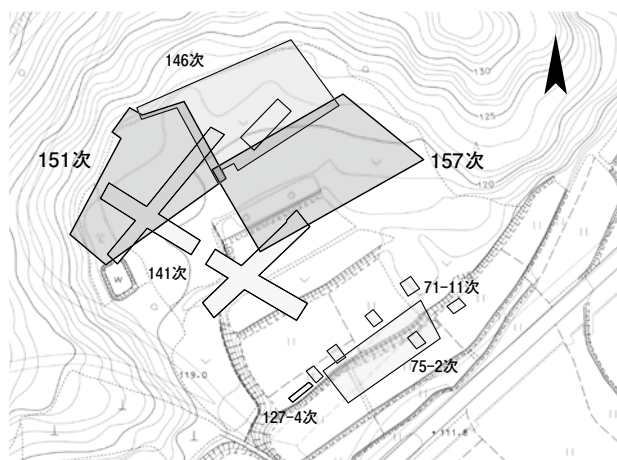


図75 調査区位置図 1:2000

質土上で検出した。なお、第146次調査で確認したⅢ期の整地土は今回の調査区まで及んでいない。

遺構の概要と時期区分 今回の調査では新たに7世紀の掘立柱建物、区画塀、土坑、溝などを検出し、谷の奥側にも広く遺構が分布することを確認した。さらに、過去の調査で部分的な検出に留まっていた建物の規模を確定することができた。

なお、第146次調査では7世紀における甘樫丘東麓遺跡の遺構をⅠ～Ⅲ期に区分しているものの、詳細な年代を示すには至らなかった。今回の調査では、整地土や土坑から多くの土器が出土し、各時期の年代を限定する資料が得られた。Ⅰ期を7世紀前半、Ⅱ期を7世紀後半、Ⅲ期を7世紀末頃とする。以下では時期ごとに遺構について詳述する。

Ⅰ期の遺構

建物2棟、塀2条、溝1条が相当する。建物は地山の標高が高い部分を利用し、低い部分には若干の整地をおこなって建てられている。

掘立柱建物SB150 調査区の西寄り、谷の奥側で確認した総柱建物。桁行5間、梁行3間で柱間は1.7m等間。柱穴の大きさは50～80cmである。建物の主軸は北で西に約50°振れる。

建物内部の柱穴は配置に乱れが認められるので、3×2間の建物2棟に分かれる可能性も考慮した。しかし、両者の距離が近すぎることで、側柱列が揃うことから1棟の総柱建物と判断した。すべての柱穴を半截して断面を確認したところ、建物内部の柱穴は側柱列に比べて掘方が浅い傾向が認められた。柱穴の1基から鉄製座金具（図81-4）が出土した。



図76 第151次調査遺構図 1 : 250

SB150の面積は第146次調査で確認した総柱の掘立柱建物SB120とほぼ等しいが、柱数や柱穴の大きさが異なる。

溝SD165 SB150の北側をL字状に巡る素掘溝。後世の削平によって一部しか残存しておらず、全周していたか否かは不明である。SB150の雨落溝とするには幅が広く、谷の後背斜面から流れ込む雨水を処理する排水溝の可能性はある。

掘立柱建物SB70 第141次調査で確認した桁行5間、梁行2間の掘立柱建物。今回の調査ですべての柱穴を検出した。柱間は桁行2.2m、梁行1.6～1.8m。柱穴の大きさは60～100cmである。建物の軸線は北で西に約35°振れる。なお、第141次調査で東側に焼土、炭と飛鳥Ⅰの土器を含む溝SD67を検出しており、今回の調査でもその延長部分を確認した。SD67は削平によって部分的な検出に留まったので、SB70の雨落溝である確証は得られなかった。

掘立柱塀SA166 掘立柱建物SB150の北側に位置する掘立柱塀。6間分を確認した。柱間は約1.8mである。正確な時期は確定できないが、SD165の手前で途切れるため、Ⅰ期の遺構と判断した。後背部の斜面と谷の内側を区画する塀であろう。

掘立柱塀SA161 掘立柱建物SB120の南側で確認した5間の掘立柱塀。柱間は平均約2m、柱穴の大きさは30～70cmと、やや不揃いである。方位は北で西に約40°振れる。SB120の側柱列と平行することから、SB120の目隠塀と考えられる。SB120とSA161の柱穴は、いずれも後述する土坑SK160によって壊されている。



図77 SB150全景（北西から）

Ⅱ期の遺構

建物3棟、塀7条、土坑4基が相当する。さらに、年代を確定できなかった建物2棟と塀1条もⅡ期に属する可能性が高い。建物はⅠ期の遺構が廃絶した後、再び整地をおこなって建てられている。

掘立柱建物SB60 第141次調査で確認した桁行3間以上、梁行3間の掘立柱建物。新たな柱穴1基を検出したことにより、桁行3間以上であることが判明した。柱間は桁行2.0m、梁行1.6m。柱穴の大きさは約0.7～1.0mである。建物の軸線は北で西に約35°振れる。建物の両側に掘立柱塀SA171とSA172が付設される。

掘立柱建物SB65 第141次調査で確認した桁行4間、梁行2間の掘立柱建物。今年度の調査で北側の3間分を検出し、建物の規模が確定した。柱間は桁行が平均1.9m、梁行2.0m。柱穴の大きさ60～90cm。軸線は北で西に約40°振れる。

掘立柱建物SB168 新たに確認した桁行4間、梁行2間の掘立柱建物。SB65と並んで建てられている。柱間は約2.3m等間。柱穴の大きさは約60～90cmである。建物の軸線は北で西に約35°振れる。

掘立柱塀SA170 調査区の南西部で確認した掘立柱塀。後述するSA171、SA172、SA173とともに、2棟の建物SB65とSB168をコ字形に取り囲む区画施設を構成する。5間分を確認し、柱間は約1.8m。軸線は北で西に約35°振れる。

掘立柱塀SA171 SA170からほぼ直角に折れ、SB60につながる掘立柱塀。一部を後世の溝によって削平され、3間分のみを確認した。柱間は約1.6mである。



図78 SK160土器出土状況（北東から）

掘立柱塀SA172 SB60に付設され、北東側に延びる掘立柱塀。9間分を確認した。柱間は約1.6m。

掘立柱塀SA173 SA172からほぼ直角に折れ、調査区北端付近まで延びる掘立柱塀。一部を削平され、6間分を確認した。柱間は約2.0m。

これらの塀のうち、谷の縁辺部に近いSA170は他の塀に比べて柱の掘方が大きく、敷地の内外を分ける区画塀の可能性がある。また、SA171とSA172の柱穴のうち、SB60に近い柱穴は他のものよりも大きい。

掘立柱塀SA174 SA170の北側で確認した掘立柱塀。4間分を確認した。柱間は約2.0m。軸線は北で西に約35°振れる。

SA174は後述する塀SA175、SA176とともにコ字形の区画を構成する。SB60の廃絶後、それに伴う区画塀を若干狭めて建て替えたものと考えられる。

掘立柱塀SA175 SA174からほぼ直角に折れ、北東へ続く掘立柱塀。16間分を確認した。柱間は約1.7m。柱穴の重複関係から、SB60よりも新しいことがわかる。また、中央付近に2間分の空白が存在し、区画内への入口であった可能性がある。

掘立柱塀SA176 SA175から直角に折れ、調査区北端付近まで続く掘立柱塀。8間分を確認した。柱間は約2.0mである。

掘立柱建物SB116 調査区南東隅付近に位置し、第146次調査で確認した総柱建物。新たに柱穴1基を検出し、桁行3間以上、梁行2間の総柱建物と判明した。柱間は桁行が2.3m、梁行が1.8m。柱穴の大きさ50～60cmである。

掘立柱建物SB57 調査区南西隅で新たに確認した掘立柱建物。桁行2間以上、梁行2間。梁行の柱間は1.8m。柱穴の大きさは70～80cmである。

掘立柱塀SA157 SA170の南西側で確認した掘立柱塀。4間分のみを確認し、調査区外へ続く。柱間は約2.0m。SA170やSA174とほぼ平行であるためⅡ期と推定したが、前後関係は不明である。

土坑SK160 調査区の北端、SB120の南側で確認した楕円形の土坑。長さ約4m、最大幅約2m、深さ約30cm。埋土からは7世紀中頃の土器が多量に出土した。土器は土坑の底付近ではなく、埋土の上層から出土する傾向が認められた。また、埋土には木炭も多く含まれていた。出土した土器の内容については後述する。

土坑SK155 Ⅰ期の掘立柱建物SB70の南で確認した不整形の土坑。長さ約3.5m、最大幅約2.5m、深さ40cm。埋土から、7世紀中頃の土器が少量出土した。掘立柱塀SA172とSA175によって一部を壊されている。

SK160とSK155は、Ⅰ期の建物群が廃絶したのち、Ⅱ期の建物を建てる直前に掘削された廃棄土坑と考えられる。

土坑SK164 調査区中央の東西畦付近で確認した土坑。長辺1m、短辺0.8mと小型であるが、多量の土師器と須恵器が出土した。

Ⅲ期の遺構

溝1条と配石遺構が相当する。第146次調査では炉SX132や掘立柱建物SB133を確認しているが、今回の調査区ではⅢ期の遺構が希薄である。

溝SD129 第146次調査で確認した素掘溝。今回の調査区内で直角に曲がり、コ字形を呈することが判明した。最大幅は2.8m、深さ60cm。後述する配石遺構SX68につながる。埋土から飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器が出土した。

配石遺構SX68 拳大の扁平な石をすり鉢状に並べる配石遺構。調査区南東端付近に位置する。第141次調査で部分的に確認し、今回の調査で全体を検出した。一部は後世の棚田の造成によって削平されている。SD129から流入する水を受ける施設の可能性がある。

その他の遺構

その他、正確な時期の不明な遺構について記述する。

石組溝SD158 調査区北西隅にある石組溝。拳大の石を側石とし、底面に扁平な円礫を敷く。東側は削平されている。断割調査の結果、Ⅱ期の掘立柱塀SA170を壊していることが判明した。

土坑SK159 調査区の北西端付近で確認した土坑。調査区の北西壁にかかるため、大きさは不明である。石組溝SD158の一部を壊している。埋土から、土師器甕が出土した。

石列SX156 調査区の中央付近で確認した石列。人頭大の石を長さ約2mにわたって並べる。石組暗渠の一部の可能性がある。

溝SD167 調査区の西端付近で確認したやや彎曲する南北方向の素掘溝。背後の斜面から流入する水を排水するための施設と考えられる。埋土からは中世の瓦器片が出土した。

(豊島直博)

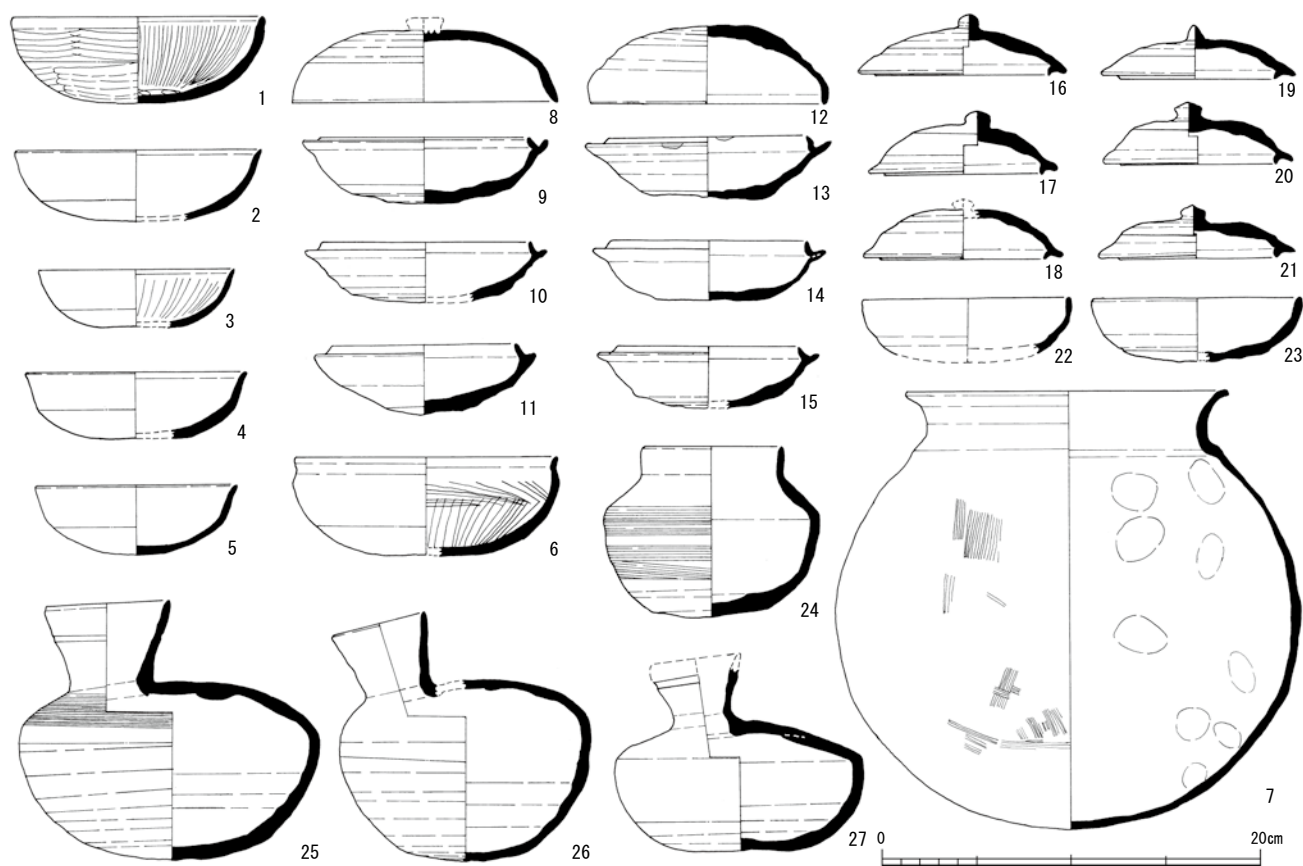


図79 SK160出土土器 1 : 4

2 出土遺物

調査区全体から多量の土器が出土した。土器以外には少量の瓦、鉄製品、鑄造関係品などがある。

土器・土製品 調査区全体から整理箱49箱分の土器・土製品が出土した。土師器、須恵器のほか、円面硯、転用硯、土馬、漆付着土器、陶磁器などがある。ここではⅡ期の土坑SK160より出土した資料を報告する(図79)。

SK160からは、整理箱6箱分の土師器(1~7)と須恵器(8~27)が出土した。土師器は杯C、高杯、甕、須恵器は杯H、杯G、平瓶、壺などからなる。

1~6は杯C。1は外面にヘラケズリとヘラミガキを施す(b1手法)が、3・6はナデ調整のみ(a0手法)である。2・4・5は、磨滅により暗文や調整は不明。径高指数は28.5~37.7で、平均は32.5。口径は10.4~13.8cmで、法量により1・2・6と3・4・5の2つに区分できる。なお、6は飛鳥Ⅰの杯Cに見られる二段暗文を有するが、傾向指数は37.7とやや浅めで、口縁が屈曲したやや異質な個体である。7は甕A。外面はハケ目を施すが、大部分が磨滅している。内面には全体に指頭圧痕がある。

8はつまみが欠損し、高杯の蓋と考えられる。9~15は杯H。口径は10.4~12.4cmで、平均は11.5cm。杯底部と蓋頂部外面の調整は、ヘラ切り5点(9・11・13~15)と

ロクロケズリ2点(10・12)である。なお13は、口縁の一部を打ち欠き、ススが付着していることから灯火器と考えられる。16~23は杯G。身(22・23)の口径はともに10.8cm、蓋(16~21)は8.9~9.6cm。23の底部は粗いロクロケズリで調整する。24は壺C。胴部にカキ目を施し、底部はロクロケズリで調整する。25~27は平瓶。25・26は胴部上半から、27は胴部下半から底部にかけてロクロケズリを施す。25は肩部にカキ目がある。27の胎土は他のものに比べ小石や砂粒が目立つ。

以上のSK160出土土器のうち、土師器杯Cの径高指数や外面調整のあり方、ならびに杯G蓋の口径は、坂田寺SG100出土土器群(『藤原概報3』)に代表される飛鳥Ⅱの特徴に近い。また、平瓶の丸みを帯びながらも肩部の張り始める形態的特徴は、飛鳥Ⅱに位置づけられる石神遺跡SE800砂層(3層)出土の平瓶(西口壽生「石神遺跡SE800出土土器の再検討」『年報1997-I』)と共通する。一方で須恵器杯の外面調整にロクロケズリが残存するあり方や土師器杯Cにみられた二段暗文の存在は、飛鳥Ⅰの新しい段階とも共通するが、土器群全体の様相は、飛鳥Ⅱの特徴に近い。よってSK160出土土器は飛鳥Ⅱに位置づけることができ、SK160に壊されるⅠ期の掘立柱建物SB120や掘立柱塀SA161が7世紀半ばまでに廃絶したことを示している。

(丹羽崇史)

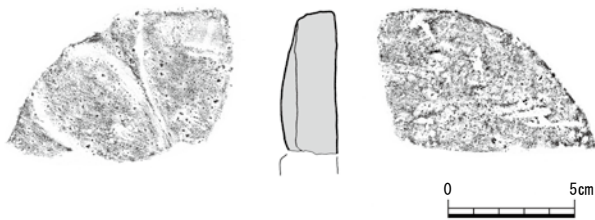


図80 第151次調査出土垂木先瓦 1 : 3

瓦 類 古代の瓦類としては、軒丸瓦1点、垂木先瓦1点、鬘斗瓦1点、丸瓦104点（10.06kg）、平瓦38点（34.16kg）、磚1点が出土した。軒丸瓦は、川原寺所用の601型式である。中房および蓮弁の大部分を欠いているため、種の同定はできない。須恵質の堅緻な焼成で、色調は灰色。包含層から出土した。図80は、船橋廃寺式の特徴を備える垂木先瓦である。焼成はやや軟質で、粗い胎土には長石、石英を多く含む。色調は外面が黄灰色で内面が黒灰色。溝SD129から出土した。同様の垂木先瓦は、第146次調査区でも5点出土している（『紀要2007』）。ただし、第146次調査では、古宮遺跡出土垂木先Aのほかにも新形式と思われる資料が出土しているが、今回出土した資料は磨滅が著しく、中房も欠けているので、この2種のうちのどちらと同範かは判断がつかない。（石田由紀子）

金属器等 遺構および遺物包含層から、鉄斧、刀子、鉄座金具などが出土している（図81）。

1は耕作土から出土した袋状鉄斧の破片である。残存長6.3cm、刃部幅4.5cmで、袋部を欠く。2・3は整地土から出土した叩折釘の破片である。残存長はそれぞれ8.0cmと4.6cm。4は環状の鉄製品で、掘立柱建物SB150の柱穴から出土した。中心付近に長方形の孔をあけ、座金具と考えられる。

鉄器の他には焼土、羽口、砥石、鋳型らしき細片など、工房に関連する遺物も少量出土している。

3 ま と め

今回の調査と、第146次調査で確認した遺構の変遷案（図82）を示し、遺跡の性格について検討したい。

遺構の変遷

I期の遺構（7世紀前半） 石垣SX100とその南西側に広がる谷を挟んで、両側に建物群が展開する。谷の西側には2棟の総柱の掘立柱建物SB120とSB150がある。両者は建物の面積がほぼ等しく、関連性がうかがえる。建物の主軸が直交するのは、SB150が谷の斜面近くに配置され、旧地形の制約を受けたためであろう。また、両者の間には掘立柱建物SB70が建てられる。いっぽう、石垣SX100の北東側には掘立柱塀SA101があり、さらに小規模な掘立柱建物SB105がある。

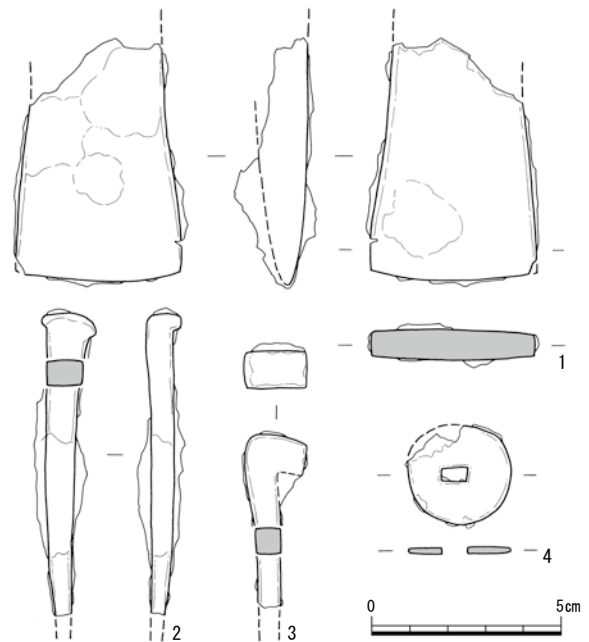


図81 第151次調査出土鉄器 1 : 2

これらの建物は、谷の深い部分を避け、地山の標高が高い部分を選んで建てられている。また、I期の建物には建て替えが認められず、比較的短期間のうちに廃絶したと考えられる。

II a期の遺構（7世紀後半） II期の遺構は建て替えを伴う。ひとまずII a期とII b期に区分するが、今後さらに細分できる可能性が高い。

II a期にはI期の石垣SX100と谷を埋め立て、多くの掘立柱建物が建てられる。南西側には桁行4間、梁行2間の掘立柱建物SB65とSB168が並ぶ。両者は南東の側柱列を揃え、計画的な配置が見て取れる。また、掘立柱建物SB60とそれに取り付くコ字形の掘立柱塀SA170・SA171・SA172・SA173によって2棟の周囲を区画する。SB60が門の機能を果たしたのか否かは、建物の全体を確認して判断する必要がある。なお、SB65とSB168の南西側が広い空地となっているが、その付近では建物としてまとめきれなかった柱穴が多数見つかり、削平されたII期の建物が存在した可能性が高い。

いっぽう、谷の東側は掘立柱塀SA115によって区画され、その延長線上に掘立柱建物SB125が存在する。SB125の側柱列はSA115と柱筋を揃え、両者が共存したと考えられる。区画の内側に当たる北寄りには、掘立柱建物SB110が配置される。

II b期の遺構（7世紀後半） II b期には、建物SB60と付設される区画塀が取り壊され、若干範囲を狭めた区画塀SA174・SA175・SA176に建て替えられる。同様に東側の塀SA115と掘立柱建物SB125も壊され、新たに掘立柱建物SB111が建てられる。掘立柱建物SB116もこの時期のものであろう。

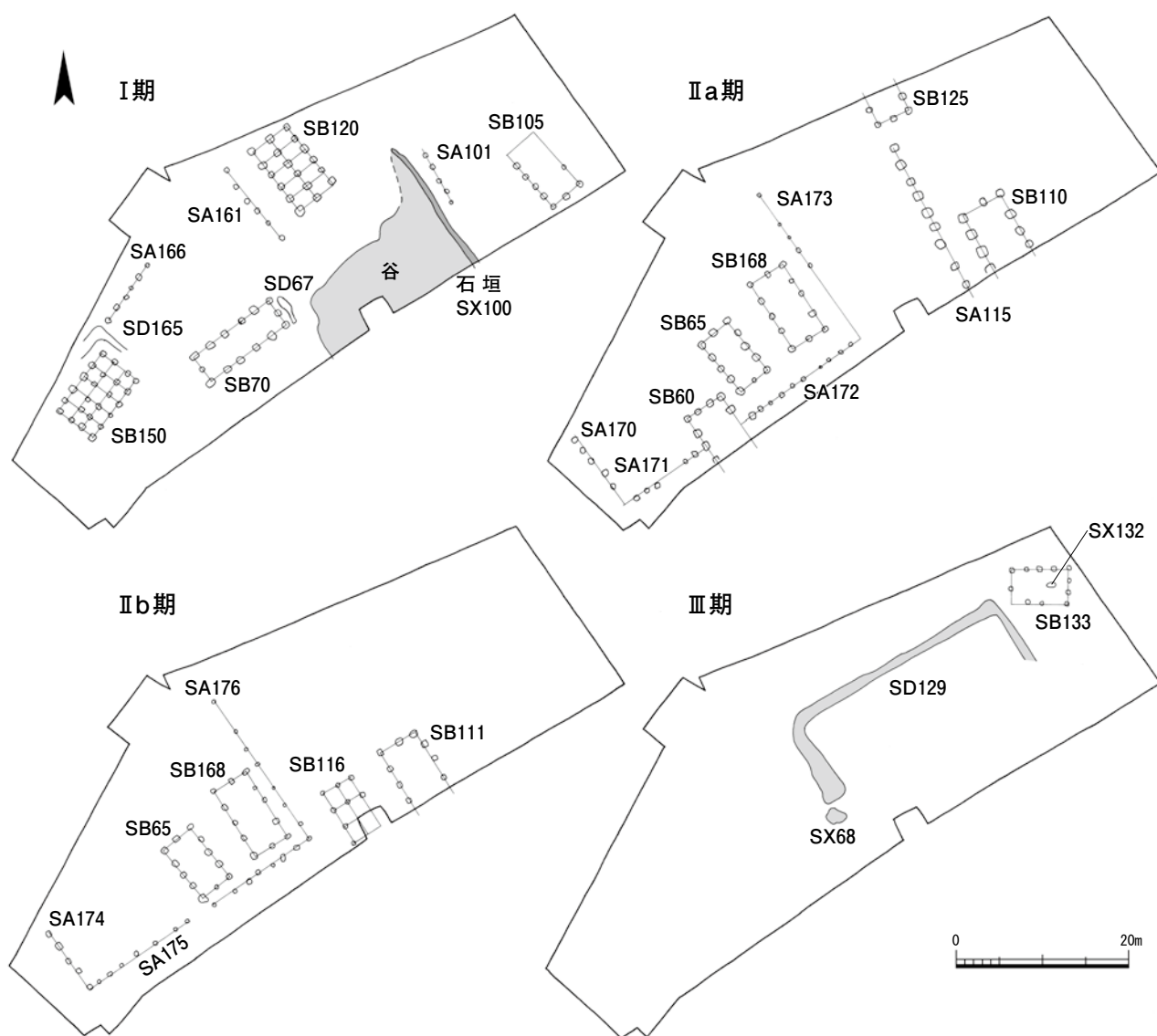


図82 第146・151次調査遺構変遷図 1 : 800

Ⅲ期の遺構（7世紀末頃） Ⅱ期の建物群が廃絶したのち、再び整地をおこなう。谷の北東奥に掘立柱建物SB133が建てられ、周辺に炉SX132が作られる。谷の中央付近にはコ字状の溝SD129が掘削される。

Ⅲ期の遺構は全体に希薄で、土地利用の形態が大きく変化した様相がうかがえる。

遺跡の性格

I期の建物群の性格 第146次調査では、I期の建物は石垣SX100の東側のみに存在すると考えられていた。しかし、今回の調査によって掘立柱建物SB120の時期がI期までさかのぼることが判明し、調査区の南西部でも別の掘立柱建物SB150を確認した。I期の建物群は谷全体に広がることが明らかになり、土地利用の変遷について新たな手がかりを得た。

また、土坑SK160から出土した土器群の検討により、I期の建物群は7世紀中頃までに廃絶することが判明した。石垣SX100や第75-2次調査で確認した焼土層の存

在も考慮すると、I期の建物群が『日本書紀』に記された蘇我氏の邸宅と関わる可能性が高まった。今後は大型建物や居住空間の有無が問題となり、谷の中心部や入口付近の調査がさらに重要性を増した。

Ⅱ期の建物群の性格 Ⅱ期には大規模な整地によって石垣SX100を埋め立て、谷の中心部にも掘立柱建物や堀が建てられる。谷の縁辺部だけではなく、中心部を含めた全体が利用されるようになる。また、Ⅱ期の建物群は堀によって区画され、土地利用の計画性がうかがえる。

Ⅱ期の建物群は建て替えを経て、7世紀末頃までに廃絶することが明らかになった。調査区全体で斉明朝から天武朝にかけての土器が多量に出土していることも、長期にわたる土地利用の裏付けとなる。建物群の性格と全体像の解明という新たな問題が提起された。

以上の成果と課題を受け、今後も継続的な発掘調査が必要である。調査を重ね、甘樫丘東麓遺跡の全容の解明を目指していきたい。

（豊島）

第157次調査

調査にいたる経緯 第157次調査は、2006年度の第146次調査で検出した石垣の全体像の解明のほか、第151次調査で谷部全面にⅠ期の遺構が展開することが明らかになったのを受け、大型建物と居住空間の有無の確認、遺構のより詳細な変遷過程の解明、ならびに谷部全体の様相の解明を目的とし、第146次調査区の南東側に調査区を設定した。調査面積は1150㎡。2008年12月16日に開始し、現在も継続中である。ここでは2009年3月末時点での調査の概要を紹介したい。

調査成果 今回の調査では、谷部の広い範囲で複数回にわたり整地がおこなわれ、大規模な造成がなされたことを確認した。調査区西部を中心に、黄褐色の整地土の面を主体として複数の柱穴、土坑などの遺構を検出した。まだ建物としてまとまってはいないが、今後の調査に期待される。また、調査区東部では石敷遺構も部分的ではあるが確認し、第146次調査で検出している7世紀中頃

(Ⅱ期)の石敷との関連が考えられる。調査区中央付近では、幅3～4mにわたる南北方向の溝を検出した。2005年度の第141次調査では、調査区南西区の南東端付近で溝SD83を検出しており、今回検出した溝はその延長部であろう。さらに、調査区南部ではⅡ期の整地土に埋められた人頭大の石列を確認している。これは据付掘方が全く確認できず、状況からみて第146次調査で検出した石垣の延長部の可能性がある。それぞれの遺構の詳細な時期は、現状では確定できない面があるが、7世紀のものが主であろう。これらに加え、底部に炭を敷いた土坑も確認しており、中近世の墓と考えられる。

調査は継続中のため、現状では不明な点も多いが、遺跡の性格や甘檜丘における土地利用の変遷を考えるうえで重要な資料が得られつつある。

遺物 須恵器や土師器など整理箱29箱分の飛鳥時代～近世までの土器のほか、整理箱1箱分の瓦が出土している。このほか、土馬、漆付着土器、鉄器、鉄滓、基石、紡錘車などの遺物が出土している。(丹羽崇史)



図83 第157次調査区全景（北西から）